3.　古事記と日本書紀

(1) 古事記の成立とその概要

天武天皇がその舎人として側近く仕えていた稗田阿礼に　諸家に伝わる「帝紀」と「旧辞」の偽りを削り正しく（削偽定実）誦習することを命じた

それから 30 年が経ち元明天皇がこの作業の継続を太安万侶に命じた　安万呂は阿礼の誦習した旧辞を撰録してこれを「古事記」三巻にまとめ　翌年和銅五年(712) 天皇に献上した

上巻に神代の神話・伝説、中巻に神武から応神(15 代)、下巻に仁徳から推古(33 代、没年 628)までを記述している　尚　安閑(27 代)から推古まではほとんど物語が無く皇統系譜のみにとどまっている

当時の朝鮮半島をめぐる国際情勢や隋との国交、佛教の伝来などの記事は全くない

文体は　漢文の語法を部分的に借用した“倭化漢文”で漢字の配列を日本語の語順に変え　音読み、訓読みを交えている

現存する最古の写本は「真福寺本」(1370 南北朝時代)で　長年無視されてきたが　国学者本居宣長により再発見された　日本書紀・続日本紀では古事記の存在に全く触れていない

宣長は三十余年をかけて古事記を研究し「古事記伝(1798)」を著わした　上代特殊仮名遣い(88 音)の発見について述べる一方で　古事記は歴史と言葉の研究においてのみならず思想や宗教の研究にも重要であり又文学としても優れているとした

上巻は神々が生まれ　大地が造られ　そこに人間社会が構築される様子を語る神話である　具体的には　A イザナキとイザナミ、B アマテラスとスサノヲ、C スサノヲとオホナムヂ、D ヤチホコと女たち、E 国譲りするオホクニヌシ、F　地上に降りた天つ神であり　その四割が出雲神話である

日本書紀も同様の神話・伝説を述べるが　出雲神話については　国譲りの話を除きほとんど記述していない　　しかし近年の考古学的発見から出雲に古代王朝の存在を窺わせる事例も多い　古事記は古代の経緯を重視して記述し　日本書紀は敗れた側の出雲の歴史を軽視していると言える

中下巻では　奔放に振る舞う一方で迷える姿をさらし生々しい人間性を感じさせる英雄と　彼らを助ける美女たちが登場する　皇位を巡る血肉の争いや恋心と野心があっさり死に繋がる話も多い

神話を超えて文学作品に通じるエピソードである　権力争いも多いが　この国の君主は古代以来政敵への報復に消極的で反逆者当人は殺しても一族を根絶やしにはしなかった

又　古事記には　負けた側への同情の色が濃い

オホクニヌシ（戦わずにタケミカヅチに国を譲った)、ヤマトタケル（景行天皇の子で皇位予定者だったが父の命で　熊襲―出雲―相模―武蔵―尾張と戦陣を渡り　三重の能煩野に没した)、カルノミコ（允恭天皇の子だが　同母の妹カルノイラツメを愛して逃亡の末死ぬ）など

全巻を通じて歌謡が多数紹介され　事件のクライマックスを歌(112 首)で語っているケースもある

一番目立つのは　宴会で歌われるもの　もう一つは異性を誘う歌である

阿礼の誦習を安万呂が撰録した（ほぼ 4 ヵ月で）と序文に記されているが　原資料は　日本書紀同様に編集メンバーが 30 年をかけて収集編集したものを使用したと思われる

（三浦佑之）

(2) 日本書紀の成立とその概要

天武天皇が中央集権国家を作るため天武十年(681) 二月に律令撰集の詔勅を出した　続いて三月に国史撰集の詔勅を出した　川嶋皇子、忍壁皇子ほか十名が集められ修史事業が開始された　その後持統五年(690) 18 氏に詔して各々の家の「墓記」を提出させた　更に和銅七年(714) 元明天皇の詔勅によって紀朝臣清人と三宅臣藤麻呂が撰述に加わった

養老四年(720) 舎人親王から元正天皇に三十巻の正史が献上された　系図一巻は伝わっていない

内容は　巻 1・巻 2 の神代記に始まり　巻 3 神武紀から巻 30 持統記（持統朝~696）までである

文体は漢文である

正史が成立してから宮廷では度々講義が行われ　その訓読や語義の解説の内容は「釋日本紀」（卜部兼方、鎌倉時代）として残されている

現存する写本としては平安初期（本文のみ）と平安中期（訓点、声点付き）のものがある

日本書紀の最初の実証的研究としては契沖の「万葉代匠記」(1690)が挙げられる　彼が奈良・平安の仮名遣いを研究し古典仮名遣いを発見してまとめたものである

その百年後　河村秀根・益根父子が日本書紀の文章の典拠を徹底的に調べ上げて　その結果を「書紀集解」(1785)として著わした

その後山片蟠桃は「夢の代」(1820)で「神功皇后の三韓退治は妄説多し、日本に文字が伝わった応神期以降はともかく　それ以前の口授伝説は用うべからず」とした

又　大正期には津田左右吉が「古事記及び日本書紀の新研究」を著わし、帝紀の応神朝以前は史実性に疑問があること　応神以後の記事にも 8 世紀の官僚による造作が多いことを明らかにした

昭和になってから津田は著書の発禁処分を受けたり有罪判決を受けたりした

戦後になって立場が逆転した津田は史学会の重鎮となり後には文化勲章を受章した

最近の有用な研究には森博達の「日本書紀の謎を解く」(1999)がある

（森は 1949 年生まれ、大阪外語大卒、名古屋大院博士課程修了中国文学、現在京都産業大教授）

森は音韻・訓詁・考拠の学に基づいて日本書紀の言葉と表記を分析し　30 巻をα群、β群、巻 30 に三分割した　α群は唐人が正音・正確な漢文で執筆し、β群は倭人が倭音・倭化漢文で述作しており巻 30（持統紀）は編集の最終段階で述作されて　同時にこの段階で各巻に記事の追加と漢籍による潤色がなされたとする「日本書紀区分論」を発表した

具体的には　巻 14 から巻 21 の中途まで唐人の続守言が　又巻 24 から巻 27 を同じく唐人の薩弘恪が執筆した（二人の唐人は 660 年の唐･新羅と百済の戦いで俘虜となり百済から日本に献上されていた）

残された巻 1 から巻 13、巻 22 から巻 23、巻 28 から巻 29 を山田史御方が執筆した　山田は学問僧として新羅に留学した経験があり　帰国後還俗して国史撰定に参加した　後には大学頭になった

元明朝の和銅七年(714) から参加した紀朝臣清人が巻 30 を撰述し　同時に三宅臣藤麻呂が全編への記事の追加と漢籍による潤色を担当した

森によれば倭人の記述した倭化漢文には　文字の誤り（不と非、不と勿、亦と且など）、否定詞の位置の誤り（為人不求官　誤　→　不為人求官　正　など）、待遇表現（上下尊卑）の誤り　（こたえていわく　対曰（下→上）　答曰（上→下）など）、普通副詞“亦”は主語の前に来てはならないがその例が 40 例もあるなど）等　日本語的発想に基づく誤りが多い由である

又　唐人の執筆したα群にも後日追記したと思われる誤った倭化漢文が混じっている由である

（古田武彦　森博達）

(3)　日本書紀の内容の問題点

ア）景行天皇と日本武尊

第 12 代景行天皇の記事には地方巡幸が多い　紀伊・美濃に始まり　周防・筑紫・豊前・日向など九州地区にも及び　さらに数年後　又も筑紫など九州全域の巡幸を行ったことになっている

同時に天皇の第二皇子のオウスが天皇の命で九州征伐に活躍する　熊襲を討つ際その勇猛さを讃えてヤマトタケルの名を献じられて以降日本武を名乗る記述には混乱が有り　天皇が討ち果たしたクマソを再度オウスが討ったことになっている　又　オウスが幼い時から猛々しい大男として記述されている一方で童女に変装して敵の首領に近づいたとする記述にも無理がある

景行天皇の九州大遠征を追ってみると周防（山口）に始まり菟狭（宇佐）・碩田（大分）・日向・襲の国（国分）・熊の郡（人吉）・葦北（水俣）八代・高来（島原）・阿蘇国・御木（大牟田）・浮羽（福岡）の行路をとっており前半の東岸・南岸では討伐の記事が多く日程も多く費やしているが後半（西岸及び中部）では日程も少なく殆ど巡行の記事になっている　強力な豪族が存在した筈の博多地方や西地区の国々を　大和の王が　すいすいと巡行したのは奇妙である

「九州地区の征討記事は筑紫王朝のそれを大和王朝の王に書き換えている」（古田武彦の指摘）

そのように受け止めると理解し易い　尚　「古事記」に景行天皇九州行き記事は全く無い

九州地区で手強い首長（熊襲建兄弟）暗殺を果たしたオウスは出雲でも首長（出雲建）謀殺を為し遂げて大和に帰着する　ところが天皇は直ちに関東征伐に向かうよう命じた「天皇は私に死ねと思っておいでだろうか」と嘆く歌も記録されている

ヤマトタケルは伊勢で斎宮をしている叔母の倭姫命（やまとひめのみこと）から草薙剣を授かる　この剣の霊威を得て東国を平定する　走水（浦賀水道）を渡る時に海が荒れて弟橘姫が入水する悲劇もあった　陸奥から日高見・甲斐・信濃を経由して尾張に戻ったが鈴鹿の能煩野（のぼの）で病に倒れる

イ）神功皇后

息長帯比売命（おきながたらしひめのみこと）は仲哀天皇の皇后となり一緒に筑紫の国へ行く「討伐するのは熊襲ではなく新羅である」との神託が有りそれを信じなかった天皇が急死する

皇后は妊娠していたが自ら海を渡り新羅を降伏させた　高句麗・百済の二国も帰属させた　帰国後筑紫でホムタワケ（後の応神天皇）を生み大和に戻ってこの子を皇太子として立て自分は摂政として国政を見た

「古事記」にもこれと共通の物語が有るがここで終わるのに対し日本書紀には再征談が続く

神功 5 年　　新羅の 1 城を攻略（人質を取り返そうとして始めた）

神功 47 年　百済と新羅が朝貢した際百済の貢を新羅が横取りしたのを咎めた

神功 49 年　南加羅など 7 ヵ国を平定

神功 62 年　新羅の朝貢が途絶えたのを咎めた

この神功皇后紀には後世の批判が多い

a.神功皇后の三韓征伐は妄説多し　　（山片蟠桃）

b.すべてが空想物語である　　（津田左右吉）

c. 3 世紀の倭の女王の記事（魏志倭人伝）と 5 世紀の倭の 5 王の記事（宋書）を意識して物語が書かれている（神功の時代を日本書紀では 3 世紀に　　古事記では 4 世紀に設定している）この時代は　百済も新羅も存在せず高句麗は半島の北部に留まっていた　（赤城毅彦）

高句麗は紀元前後に出現したが当時は半島北部を支配しておりその南は三韓（馬韓辰韓弁韓）で 4 世紀半ばに馬韓が百済に辰韓が新羅となった弁韓は任那となったが後に百済新羅に併合された 15

尚　日本書紀自体にも　魏志の内容を注記している

神功 39 年　「魏志に言わく　明帝の景初 3 年ーーー」

神功 40 年　「魏志に言わく　正始元年にーーー」

神功 43 年　「魏志に言わく　正始 4 年にーーー」

神功 66 年　「魏志に言わく　晋の武帝の泰初 2 年にーーー」　など（卑弥呼と壱与の名を伏せて）

魏への遣使記事を記している

柵法制度の許で中国の天子と君臣関係を結んだことをボカシして記述している

ウ）聖徳太子の偉業

推古 11 年(603) に太子と島大臣（蘇我馬子）は「冠位十二階の制」を定め官職や地位の世襲制を改めた　その翌年太子は仏教や儒教その他中国の思想を取り入れて「憲法十七条」を作り朝廷に仕える豪族に対し官吏として守るべき道を示した

推古 15 年(607) 太子は中国の大唐に対し小野妹子を遣使として派遣した　翌年　大唐からの使節裴世清が帰国する際には遣使として留学生高向玄理、学問僧旻らを同行させて　中国の政治制度・学問・宗教を学ばせた

推古 28 年(620) に太子と島大臣が「天皇紀」と「国記」を録した

（日本書紀では隋と書くべき所を大唐と記している　又　高向玄理については白雉五年(654)にも再度派遣したことになっている）

これらの記述に対する後世の批判の一部を示す

a.当時は実態として氏族社会であり　君・臣・民の階級に基づく中央集権的官僚制は実現していなかった　推古朝では国司の役職も未だ無かった　（津田左右吉）

b.憲法十七条のうち正しい漢文は六条のみで　他は倭習が見られる「非」「亦」「少」「所以」「之」の誤用、「不」と「勿」の混用、語順の誤りなど文体的にも文法的にも誤り多く太子の真作とは思えない　（森　博達、石井公成）

c.「君は即ち之を天とし臣は即ち之を地とす（三条）」とあるが推古朝では豪族の上に立つ大王であって天子ではなかった　同時代の倭王多利思北弧（日出ずる処の天子）こそ天子に相応わしい」
又　隋書では倭王は妻を持つ男王として明記しており推古帝ではありえない　（古田武彦）

d.「天皇紀」を録したとあるが天皇の称号は持統朝(689) に初めて出てきた言葉である（古田武彦）

尚　一方の「古事記」の系譜に厩戸皇子の名前こそ記されているがその業績の記録は全く無い

（用明天皇の子としての上宮之厩戸聡耳命）

(4) 乙巳(いっし)の変

皇極四年(645) 6 月　飛鳥板蓋宮大極殿で朝鮮半島の三つの国高句麗・百済・新羅の三韓が調(みつぎ)を奉る
その時を狙って　当時の朝廷の実力者蘇我入鹿に中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)が切りつける事件が起きた
中大兄皇子は中臣鎌足(なかとみのかまたり)と共に周到な準備を進め三韓の表を読み上げる役の蘇我倉山田石川麻呂（入鹿の従弟）も仲間に引き込み　当日は刺客も用意していた　上表文読み上げが終わろうとしても刺客が飛び出さないことにしびれを切らした中大兄皇子が自身で斬りつけたのである
斬られた入鹿は玉座の女帝皇極（舒明天皇の皇后で天皇没後即位）に「私に何の罪があると言うのでしょうか　お教えください」と詰め寄った
皇極が息子の中大兄皇子に説明を求めると「入鹿が王族を滅ぼして天位を奪おうとしている」と皇極帝に説いた　皇極は言葉を失ってその場を立ち去り　入鹿にとどめが刺された
（前年の 11 月　蘇我入鹿が政局運営の邪魔になった山背大兄王(やましろのおおえのおう)（聖徳太子の子）を斑鳩宮(いかるがのみや)に急襲して一族を滅亡させる事件が起きていた）
衝撃を受けた皇極が退位し　弟の軽皇子が即位し（孝徳天皇）中大兄皇子が皇太子に　中臣鎌足が内臣(うちつおみ)になって新政府が樹立された
日本書紀の記述に従えば　聖徳太子が推古時代に律令制導入の流れを作ったが　蘇我蝦夷・入鹿ら蘇我本宗家の抵抗で頓挫していたことになる
この事件の翌年(646) 「改新の詔」が出され　公地公民制度、班田収授の法が明文化されたと日本書記に記されている
このため明治時代になって　この乙巳の変が「大化の改新」と呼ばれるようになった
（杉浦重剛「日本通鑑(つがん)」明治 21 年）
孝徳帝は都を難波に開き（皇極時代に準備されていた）行政改革に努めようとしたが　実権を握る皇太子の中大兄皇子との溝は広がる一方であった　その中で中大兄は都を元の飛鳥に遷すよう提案し　帝が認めぬまま　実力で遷都を実行して　孝徳帝を難波に置き去りにした
孝徳帝が憤死した(654) 後　皇極上皇が二度目の皇位に即いた（斉明天皇）
これより先　4 世紀から朝鮮半島の百済・新羅が　九州の筑紫朝に朝貢していたが　6 世紀になってこの二国が　大和朝にも朝貢するようになっていた
そして　この時代の朝鮮半島は　国の対立が深まり　小競り合いが長年続いていた　643 年　百済と高句麗が同盟して新羅を攻め　新羅は唐に救援を願い出ていた
そのような事情の中で百済から加勢を要請された中大兄は鎌足と協力して百済救援の準備を進めた
660 年　唐は矛先を高句麗から百済に変えて攻め　これを滅亡させる　暫くして百済の将軍鬼室福信が復興に立ち上がり筑紫朝に人質としていた余豊璋を呼び戻して王に立てようと目論む
翌年中大兄らは百済救援のため筑紫に赴くが同行していた斉明天皇が朝倉宮で崩御してしまう(661)
中大兄は皇位には即かず実権を握って称制(しょうせい)を敷く
余豊璋は百済に戻って王となるが　福信の人気の高いのを妬み　彼を惨殺する　猛将の死を知って勢いづいた新羅が唐と共に　再起した百済を攻める
日本から救援の大軍が海を渡るが待ち受けた唐軍のために白村江で壊滅的な敗戦を強いられる(663)

白村江の戦いの後　中大兄は大津に遷都する(667)　ここで正式に天皇位に即く(668)

（古田武彦　関　裕二）

(5)壬申の乱

671 年 10 月病床の天智天皇が大海人皇子を呼び出した時蘇我安麻呂から「天智に奸計あり」と聞いた大海人皇子は　天智の後継打診に「臣は不幸にも多くの持病有りて天下国家を保つこと難し願わくば天下を皇后に任せ大友皇子を皇太子に立てさせたまえ　臣は今日より出家して陛下のために功徳を修めん」と辞退し直ちに吉野に逃れる

その年 12 月 3 日天智天皇が崩御した

吉野にいる大海人皇子のもとに朴井連雄君などから様々な報告が届く

「近江の朝廷が山陵を造らむためと称して美濃・尾張の国司に命じて多数の兵を集めているが山陵を造るのではなく事を起こそうとしている」

「近江京より倭京に至る処に候（見張り）を置いた　亦　菟道の守橋者に命じて皇太弟の宮の舎人の私糧を運ぶことを制限している」

吉野の大海人皇子に対する監視が強化され食糧の運搬も遮断されたことを意味する

この後日本書紀の原文は“大海人皇子事の已に実なることを知りたまひぬ詔して曰はく「朕　位を譲り世を遁るる所以は独り病を治め身を全くして永に百年を終えへむとなり然るに今已むこと得ずして禍を承けむ何ぞ黙して身を亡ぼせむや」とのたまふ”と記されている

続く 6 月大海人皇子が部下に命じた

「近江朝の奸臣たち（蘇我赤兄や中臣金などを指す）が朕を害わむと謀っていることを今聞いた　汝らは急に美濃に往りて湯沐令多臣品治（大海人皇子出生時の養育係の任にあった）に告げ　要機を示して先ず当郡の兵を発せよ」と

6 月 24 日大海人皇子一行は吉野を立ち郡家に向かう　2 日後男依がやってきて「美濃の兵三千人を発して不破道を抑え東部から近江へ参加する軍を塞いだ」との朗報をもたらした　大海人皇子は男依の働きを誉め　郡家に到着してから先ず高市皇子を不破に遣わして軍事監督に当たらせた　（不破は関が原）

この後　大海人皇子の軍は連戦連勝し　程なくして大友の自害が伝えられた　7 月 3 日には早くも大津を陥とした

日本書紀巻 28「天武紀上」（20 ページ）は全てこの壬申の乱の記述に充てられこの内戦が奸臣を成敗し王朝を復興する大義のためだったと強調している

尚　天智天皇の子　大友皇子が即位したことについては触れられておらず明治維新後（明治 3 年 1870）第 39 代弘文天皇として　天武天皇の前に記載された

12 世紀の「扶桑略記」や江戸時代の水戸黄門の「大日本史」では大友皇子が天皇として記載されている

（古田武彦　関　裕二）

(6)日本書紀成立の背景に見えるもの

ア）壬申の乱の正当化（天武天皇の意図）

天武が天皇の地位について 10 年　左右大臣を活用せず　天皇直轄統治路線をとった天武は真の中央集権国家をつくるため　律令撰修の詔勅を出し続いて国史撰修の詔勅を出した

中国の例に鑑みても国史の重要性を十分認識しており自分がリーダーとなって自分の意図する国史を作り上げようと決意した　その天武にとって　自分が天皇位に即く正当性を先ず強調することが必要であった　そのためにはクーデターで前帝を倒し自分がとって代わった事実は何としても消しておくことが必要であった

又　近畿の大和王朝の前に同じ日本列島の中に既に律令国家九州王朝が存在したことも消しておくことが必要であった

これから新しく作る国史によって過去を総括し　自ら定める律令によって　新時代の国を統治するその頂点に天命を受けた自分が立つのである　（中国古来の政治思想“易姓革命”を継承）

このような天武天皇の意を承けて編集委員が任命され資料収集作業が進められた

（大和岩雄、遠山美都男ほか）

イ）九州王朝を史上から抹消

白村江の戦で滅びた九州王朝の地に進駐した唐の駐留軍が引き揚げた後　その地の統治に入った大和王朝は　そこに残された史書類、神話伝説伝承類、中国との交流に伴う記録や物品類、統治に伴う律令や年号の記録類を徹底的に洗い出しこれらを没収した

遠い過去の神話・伝説・伝承は一部を近畿に置き換えて利用し、九州王朝の律令や年号に関わる記録や痕跡は徹底的に消去に努めた　この消去活動は元明天皇、元正天皇の時代まで続けられた

慶運四年(707) 元明天皇詔勅“山沢に亡命して軍器を挾蔵し百日まで首(もう)せずんば罪に復すること初の如くす”　　和銅元年(708) 元明天皇詔勅“山沢に亡命して禁書を挾蔵し百日まで首(もう)せずんば罪に復すること初の如くす”　養老元年(717) 元正天皇詔勅“山沢に亡命して兵器を挾蔵し百日まで首(もう)せずんば罪に復すること初の如くす”　（続日本紀）

中国の律令制は秦から唐に至るまで連綿として続いていた　三世紀の魏朝の軍事司令官（塞曹掾史）として張政が倭国にきて長年駐在しており　その際軍団を律令で統率した筈であり当時の倭国（筑紫朝）がそれを見倣ったのはごく自然である

隣国の新羅本紀にも「520 年正月律令を領示す　始めて百官、公服、朱紫の秩を制す」とある

又　日本書紀に初めて元号が記載されたのは　孝徳期に大化と白雉が有りそれが一旦途絶えて天武期に朱鳥が一度だけ記され　連続する元号が現れたのは文武天皇 5 年(701)の大宝（律令）でこれ以来連綿として続いている

一方　韓国（李氏朝鮮）の史書「海東諸国記」(1471)、日本の浄土宗の史書「麗記私抄」(1401)には 520 年頃（日本書紀の継体天皇期）から連続した元号が記されている（両書に一致しない部分もあるが一応九州年号とする）

この年号には僧聴(536~41)（宣化元年～欽明 2 年）、賢接(570~76)（欽明 31～敏達 5）、命長(640~47)（舒明 12～孝徳 3）があり　天皇の代替わりが有っても新しい年号になっていない

（日本書紀の年号の内　白雉と朱鳥は九州年号と時期が一致していて大化は 2 年程前にずれている）

（古田武彦）

ウ）先帝意識の変化

豪族の政治関与を極力抑え一部皇族を駆使した実力者の天武は　律令体制の実現に当たっても

国史の編纂に当たっても指導力を発揮していたが　その没後持統天皇を経て文武朝になると天武の権威が落ちて天智が復活する
699 年文武天皇詔勅で越智山陵（斉明）と山科山稜（天智）の造営が始まったがその山科山陵は藤原京大極殿の真北に位置した（1998 年　藤堂かほるが初めて指摘した）
藤原京の天極に山科陵を営むことは天智が律令国家の受命の天子として祭祀対象となるよう位置付けられたことを意味する　即ち天武に代わって天智が先帝となったのである
（古田武彦）
エ）乙巳の変の正当化（藤原不比等の意図）
鎌足の子　不比等は天武朝で任を得られなかったが天武が没した後の持統朝で重用され次第に権力を伸ばして遂に廟堂の第一人者となる
ところが当時の豪族（例えば蘇我・物部・葛城・巨勢・平群（へぐり）・大伴など）に比し藤原の先祖は取るに足らない家とされていたので　由緒ある先祖に作り上げる必要があった
そのため不比等は「偉大なる先帝天智とそれを支えた藤原鎌足」のストーリーを考えた
それには蘇我宗本家の入鹿を倒した乙巳の変を先ず正当化しておかねばならない　手始めに一代前の厩戸皇子を聖君子化しその継承者山背大兄王を倒した蘇我入鹿は大悪人であるとした
氏族社会から律令制への改革に天智自身は消極的だったがこの事実を逆転させて　先ず聖徳太子が憲法を制定し天皇専制的中央集権国家を指向し官吏の心構えを説いて新しい国の基礎を固めた偉大な存在だったと称揚した　その改革の流れに逆らった入鹿を倒して障害を排除したとしたのである
次いで乙巳の変後　改新の詔を発し豪族の私有地を制限して公地公民制を実施し行政区画を改め又班田収授の法、調庸の制を改めたとして　その功績は大であると日本書紀は総括している
この詔勅(646 年)が事実であれば孝徳天皇期の筈であるが　何故か天智と鎌足の功績としている
（尚　既に述べたように　乙巳の変が大化の改新と呼ばれるようになったのは明治以降である）
1967 年 12 月藤原京の北面外堀から出土した大量の木簡（699 年に書かれたもの）によって改新の諸政策は 8 世紀以降のものであり　日本書紀の記述は後世の潤色であることが判明している
（古田武彦、大和岩雄、遠山美都男、森博達、関裕二など）
オ）編集方針の変化
天武の詔勅から 30 年近くを経て日本書紀の完成が急がされていた
一方　藤原不比等は娘宮子を草壁皇子（天武・持統の子）の遺児の文武天皇に嫁がせその子（首皇子後の聖武）を皇位に即けるよう元明天皇（草壁の正室）を説得しそれに成功していた
不比等は天皇の外祖父となるため早くから着々と手を打っていたことになる　文武に皇族からの女子を近づけさせなかったのもその一手であった
国史の編纂が進み　巻 24「皇極紀」巻 25「孝徳紀」巻 26「斉明紀」巻 27「天智紀」は唐人薩弘恪による執筆が終わっていたが不比等の意を承けて三宅臣藤麻呂による加筆が始まった
孝徳紀の詔勅、斉明紀の詔勅には明らかに加筆の跡が有り皇極紀と天智紀には大量の記事が追加されその中には表記上の間違いだけでなく叙位の重複、長門・筑紫築城の記事の重複など杜撰な記事が有り編集上の遺漏欠陥も多い
編集の最終段階で強力な指導を行った不比等が自身の高齢と病状から修正編集を督促し未整理のまま提出させたことが窺える
日本書紀は養老四年(720) 5 月舎人親王から元正天皇に奏上されたがその年 8 月不比等(62 歳)が死去し　翌年(721) 12 月元明太上天皇(61 歳)が崩御した　（森博達、関裕二）

(7)万葉集について

万葉集は 7 世紀から 8 世紀にかけて詠まれた歌を編んだ最古の和歌集である　天皇、皇族から下級官人、防人など　さまざまな身分の人の歌を集めている

相聞歌（主として男女の恋を詠みあう歌）挽歌（死者を悼み哀傷する歌）雑歌（宮廷行事や旅を詠んだ歌、自然や四季をめでた歌）の三大部類に分けられ　20 巻 4,516 首からなっている

全文が漢字で書かれ漢文の体裁をなしているが　歌は日本語の語順で書かれ　表意的に書かれたもの、表音的に書かれたもの、表意と表音を併せて書かれたものなど多様である

ア）構成上の問題点

a. 万葉集と言いながら 5 千首未満である

b. 九州人、瀬戸内人の歌がほとんど無い

c. 白村江の戦いで 2 万人を超える死者を出しながら　この悲劇を嘆く歌が無い

d. 正史の「続日本紀」（797 年成立）に　万葉集の記事が無い

この不自然な構成となったのは九州王朝の文書が禁書とされていて　その王朝の歌は隠す必要があったためである　歌集中の注に右の歌は「古集」中に出づの記載があったり　九州年号がポロリと出てきたりしている

「新撰万葉集」（菅原道真編纂 889 年）序文“二十巻の萬葉集が古歌数十巻から編まれた”

「古今和歌集」（紀貫之編纂 905 年）仮名序“萬葉集に撰ばれなかった古歌の中から優れた歌を撰して加えた”（そのためか古今和歌集の 4 割が詠み人知らずである）

（古田武彦、中小路駿逸）

イ）藤原一族の権力拡大の経緯

藤原不比等は天武朝で任を得られなかったが　天武が晩年病気がちになると　持統皇后に接近する

天武の後継候補者が三人①高市皇子（母は宗形氏―宗像神社）②大津皇子（母は持統の姉の大田皇女、但し若くして死去）③草壁皇子（母が持統）居て　草壁を立てることに執心していた持統に　不比等が策を献じたと思われる

686 年 9 月天武が崩御すると　翌 10 月　大津皇子が謀反の罪で捕えられて自害させられる

大津の姉　大伯皇女は伊勢神宮の斎王だったが罷免されて飛鳥に帰る　彼女は大津の屍を霊地二上山に替葬したが　周囲に阻止されることは無かった

「わが背子を大和へ遣ると　小夜深けて　暁露にわが立ち濡れし」

687 年　持統が即位　この時　高市皇子を太政大臣に指名して納得させた

689 年　草壁皇子即位の時を窺っていたが　当人が病死してしまう

696 年　高市皇子が変死する

697 年　草壁皇子の子（珂瑠皇子14 歳）が文武として即位する　　持統が 52 歳で退位

不比等は　娘の宮子を　文武の妃に入れる

707 年　病弱の文武が譲位し　母親が元明として即位する

713 年　貶卹事件　（文武の二嬪　石川氏と紀氏　が格下げされその男子らが列外に退けられる）

714 年　首皇子（宮子の子 13 歳）が立太子

715 年　元正即位　（元明の娘で文武の姉）　　元明が皇位を投げ出す

717 年　平城京へ遷都　　左大臣石上麻呂を旧都に置き去りにする

旧都となった藤原京は　蘇我氏が地盤とする地で　天武が本格的な都として計画した所であった
従来の飛鳥浄御原宮、近江大津宮、難波長柄豊崎宮が掘立て柱だったのに対し　藤原京は礎石を敷き瓦を葺いて御殿を建て　条坊制の区画を敷いた　ところが不比等は　蘇我氏の地を嫌い　新たな地に遷すことにした　新しい平城京では　東側にある高台に外京を設け　此処に藤原一族の邸宅と氏寺など―興福寺、春日神社―を建て　天皇の御所を見下ろすことにしていた

720 年　不比等　没

藤原武智麻呂が中納言に　藤原房前が内臣に昇進

724 年　聖武即位（首皇子 23 歳）　不比等の娘光明子が妃に入る

729 年 2 月　長屋王事件　（高市の子で右大臣を務めていた長屋王が謀反の疑いで自刃させられる）

729 年 8 月　光明子が皇后になる　皇族出身者でない妃が皇后になるのは初めてである

731 年　参議官に武智麻呂と房前　議政管に宇合と麻呂が加わり　藤原の 4 兄弟全員が　政権中枢に入る　（従来　豪族で政権に入るのは　一族から一人を定例とした不文律が破られた）

737 年 4~8 月　天然痘で　藤原 4 兄弟が全滅する

「日本霊異記」（737 年編纂）は　長屋王の祟りを暗示し　日照不足、落雷、大地震、疾病蔓延などと聖武が懺悔する様子を描いている

741 年　国分寺、国分尼寺建立の詔勅

743 年　大仏造立の詔勅

745 年　興福寺の裏側に東大寺建立着手

749 年　孝謙即位（聖武が娘に譲位）

756 年　聖武上皇崩御

（関　裕二）

ウ）背後に藤原氏の存在が疑われる奇妙な（歌などの）事例

a.平城京の前の　飛鳥や藤原京の古き良き時代を懐かしむ

46,48,49　柿本人麻呂　　草壁皇子を追慕する形をとって古へを懐かしむ

64　　志貴皇子（天智の子）　飛鳥や藤原京が懐かしい

78　　元明天皇　　飛鳥を去るのが辛い

324,325　山部赤人　　古への明日香を思うと涙が止まらない

b.天皇の地位にあって　戦争の予感に怯えている

76　　元明天皇　　ますらをの鞆の音すなり　もののふの大臣　楯立つらしも

77　　御名部皇女（元明の妹）わご大君　物な思ほし　皇神のつぎて賜へるわれ無けなくに

もののふの大臣とは　当時右大臣の石上麻呂を指している

石上麻呂はその後左大臣に昇ったが　不比等の策で　平城京遷宮の時　旧都に置き去りにされた

「竹取物語」（かぐや姫が求婚してきた公達たちに難題を出した物語）

くらもち（庫持）の皇子（不比等に比定）は　「真珠の実をつけた金の枝」を要求されて　遠地に出かけたと見せかけ　実は鍛冶の工人に作らせ　2 年を経て旅から持ち帰った枝を提出したが　工人が報酬を求めて顔を出したのでバれて失敗する　　（不比等の策士振りを描出）

中納言石上麿足（石上麻呂に比定）は「燕の生んだ子安貝」を要求されて取りに行くが　ある知恵者の案で　網で作った粗籠に乗ったところそれを吊った綱が切れて大怪我を負いその後死んでしまう

c.元明天皇の奇妙な詔勅

707 年即位　　「我が子文武が病のため母上に譲位したいと何度も仰るので　気の毒であり畏れ多いことであるが　承ることにした」

708 年平城京の計画　「朕は望まないが　王公大臣が遷宮すべしと言うので　止む無く新しい都を建てることにした」

715 年退位　　「朕は　上天の助けを蒙り　先祖の善行によって　国を固め　天下は太平であった　その間も　恐れ戒める気持を持ち　慎んで政治に心を砕いた　それから 9 年経ち　容色衰え　年老いたので　自由を求め安らぐため　皇位を投げ出す」　　娘が元正として即位した

（関　裕二）

エ）大伴旅人と大伴家持

大伴氏は大和建国以来の名門氏族で　旅人は　高市皇子の子の長屋王と親しく　反藤原派の中心的存在であった

727 年　旅人が　太宰師（おおみこともちのかみ）に任命され　九州に赴任する

九州では　山上憶良らと共に筑紫歌壇を形成するが　やがて望郷の念いが昂じて酒浸りとなり自虐的な歌が多くなる

341　賢（さか）しみと物いふよりは酒飲みて酔（えひ）泣きするがまさりたるらん

343　なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ

344　あな醜（みにく）　賢（さか）しらさすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る

729 年 2 月　長屋王事件発生　　（反藤原派のリーダーが自刃さきせられた）

729 年 10 月　旅人が寝返りして　藤原房前に歌(810,811)と琴を送って命乞いし　房前から帰京を許すことを内示した歌が贈られる　　（旅人に希望が湧き鬱屈した気分が晴れる）

730 年正月　　旅人の屋敷に友人や官人を招き 32 人で梅の花を愛でる歌を詠む

その序文は“時に初春の令月　気淑く風和らぐ　梅は鏡前の粉を披き　蘭は珮後の香を薫らす”として心を自然に向けてくつろぎ酒杯を廻らせば言葉を忘れるほど楽しく満ち足りた思いがする　漢詩には落梅を詠んだ詩編がある　さあ我々も庭の梅花を見て歌をつくろうではないかと呼び掛けている

旅人の子家持は　万葉集に 473 首の歌を載せ　又編纂者に比定されているが　政治的立場では橘奈良麻呂らの反藤原派と距離を置いていた　そして一族に　自重を求める長歌を残している

4465　族（やから）に諭す歌　　大伴家持

大伴の名を持つますらをたちよ　われら大伴は神代から　天孫に仕えてきた名門である　先祖の名を絶やさぬよう　自重せよ

756 年　大伴古慈悲と淡海三船（大友皇子の曾孫）が「朝廷を誹謗し人臣の礼を失した」として禁固処分を受ける

757 年　「奈良麻呂の変」で　反藤原派が一網打尽となる（藤原仲麻呂らが権勢を振るい処刑者多数）

大伴家持 718~785)の官歴；(一部を抜粋)

746 年　従 5 位下　越中守

758 年　従 5 位上　因幡守

764 年　　薩摩守

775 年　従 4 位下　相模守

これら地方勤務中に　東歌・防人歌などを収集したと思われる

783年　従3位　中納言
784年　　持節征東将軍
785年9月　大伴継人らによる藤原種継暗殺事件に連座して　官から除名　家財没収
　　10月　家持　没
806年　（20年後）家持の連座の罪が冤罪と判断され　復位（従3位）する
　　この時　大伴家に戻された家財の中から　万葉集の原稿が見出されて　後世に伝えられた
尚　万葉集の中で年次のわかる最後の歌は家持が759年因幡で詠んだ歌である
（古田武彦、関　裕二）

オ）柿本人麿の歌

人麿の歌は　長歌19首、短歌75首及び“人麻呂歌集に出づ”275首が万葉集に載せられている
枕詞、序詞、押韻などを駆使した格調高い歌風で　万葉集第一の歌人と一般に評されている
しかし　その人麿が　正史の続日本紀には全く現れない
その理由について　6位以下の下級官吏だった（契沖、賀茂真淵ら）の説もあるが貴人に奉る歌も多いので妥当ではない　　政争に巻き込まれて刑死（水死）したので削除された（梅原武）の説も　当時は水死の刑は無かったので無理がある
終焉の地は　その辞世の歌から石見国（島根県）浜田市の亀山（鴨山）と見られるが（異説あり）
その死に寄せた挽歌を“丹比真人名をもらせり”（筑紫朝の高官の職位）が詠んでいることから
人麿が　かっての筑紫朝の宮廷歌人であり　その後近畿の持統朝に登用され　結果的に両王朝に仕えたと解することが出来る
8世紀の初頭　筑紫朝の文書は全て禁書であったから　万葉集の編纂者が　大量の優れた歌が埋もれてしまうのを惜しみ　苦心して大和朝にはめ込み　後世に残したと思われる
歌の詠まれた時と場所（又は対象者）を変えて　新たにつくる歌集に組み込み　注記を加えた
（これらの注記は意図的に下手に書かれたフシが見られ　後世の識者が真相を読み解くことを期待したと思われる）　そのように考えると納得し易い歌がたくさん有る
編纂者は　この万葉集がなるべく人目につかぬように　若し人目についても　咎められることの無いように　そして本当の狙いは　これが後世に確り伝わって広まることを願っていたのであろう
4516 新しき　年の初めの　初春の　今日降る雪の　いやしけ吉事　　家持　（万葉集最後尾の歌）
（藤原支配の時代が早く終わってこれからは今日降る雪のように良いことが沢山ありますように）
歌の詠まれた場所を変えると　歌の価値が変わる例　（古田の例示は20件以上）
　　天皇、雷岳に御遊しし時、柿本人麿の作る歌一首
　235　大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも
　　右、或る本に曰はく忍壁皇子に獻るといへり
　　その歌に曰はく　王は神にし座せば雲隠る雷岳に宮敷きいます
この歌は　ただに万葉集の秀歌というより　日本精神を代表する名歌として　戦前には喧伝された歌である
加茂真淵「天皇は顕し神にます故に　雲の中の雷の上にみやゐさせますとなり　丘の名によりてただに天皇のはかりがたき御いきほいを申せりける」
伊藤博文著「憲法義解」に　明治憲法第三条「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」の案出のもとにした　と
斎藤茂吉「一首の意は　天皇は現人神にましますからして　今や天空に轟く雷の名を持っている山の上に行宮を御作りになって御入りになり給うた」

古田がこの「雷岳」とされる奈良県明日香村の雷を訪ねるとそこにある丘は　高さ 10 メートル前後のまことに低い小丘であり　登るのに 5 分もかからないから　丘の上で天皇の小休止はあり得ても「廬(いほ)らせる」と表現するのは奇妙の感を覚えた　まして小丘に登る天皇を「大君は神にしませば」と表現するのも馬鹿げていると感じたのである

一方　福岡県前原市（筑前）の雷山(らいさん)を訪ねると高さ 955 メートルで　北に玄界灘、東に博多湾、西に唐津湾を擁しているから　連日「天雲」におおわれている

当山には雷社(いかずちしゃ)があり　現在は中腹にあるが　本来は　上宮・中宮・下宮が配置され　上宮には三社が配祀されて　中央にニニギノミコト、左右に天神七柱・地神五柱が祀られていたという

この歌が詠まれた時は七世紀末　白村江の敗戦の後で　多くの将兵が百済の海に没し　筑紫には唐の占領（進駐）軍が駐留していた　庶民の家々は荒れていて　働き手を失った生活はことごとく荒廃していた　民のいほりは荒れ果てていたのである

その荒れた家々の中を通って人麻呂が雷山に登ると　そこに九州王朝の始祖たるニニギノミコトを始め　天神・地神が祀られていたのである　その姿を詠んだのである

尚　原文は　「皇者　神二四座者　天雲之　雷之上尓廬為流鴨」で　主語は「大王(おおきみ)」と読むのではなく「すめろぎ」と読み「皇統の中の各王者」を指していると解するのが妥当である

又　この場合の「神」は西欧風の「絶対神」でなく　かってこの世に生きていた人々、今は死者となっている存在を　「神」として祀る（例えば乃木大将を神社に祀る）普通の日本人の用法に従っているのである

唐との無謀な戦いに突入し　自己の将兵多数を異国の海の藻屑と化せしめた　九州王朝の君主も今は死んでいて　先祖と共にこの山に眠るとの認識で　人麻呂が詠んだのである

人麻呂を明日香村の雷岳(いかずちのおか)に置けば　その作歌態度は御用歌人のへつらいと　見做されるが筑紫の雷山(らいさん)に置けば　白村江の悲劇を絶唱した名歌に生まれ変わる

天の香具山も場所を九州に移すと歌が生き返る

2　（舒明天皇御製）　山常(やまと)には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば
　　国原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし国ぞあきず島　八間跡(やまと)の国は

（契沖、真淵は香具山の形を誉めていると評したが）　大和盆地では①海が見えない②鷗がいない　③とりよろふと言っても周りの山より低い④煙がいつも立つことはない　などの批判があった

場所を九州の別府湾の鶴見岳 1375 メートルに移すと将(まさ)にぴったりする　安萬(あま)という地名があり　かぐつちの山と呼ばれていた経緯もある　ここなら海も鷗も山の高さも煙（別府の川にはいつも湯けむりがたつ）も文句なしに条件を満たしていて　場景に相応しい優れた歌となる

28　（持統天皇御製）　春過ぎて　夏来(きた)るらし　白妙(しろたえ)の衣乾したり　天の香具山

飛鳥の香具山は大和盆地から見て 52 メートルの高さで　白布を掲げても見えにくい

（NHK 撮影班が撮影を試みたが良い画像が得られず失敗）

別府湾の鶴見岳に場所を移すと　その山中に神社が有って　その広い境内に宮司や巫女の衣を乾す場面が見られる　夏の到来を実感できる

（飛鳥の香具山は小さな祠があるだけで生活の場ではなく衣を乾すこともない）

（古田武彦）